■ HRD FINE ART 展覧会開催のご案内 ■

IO

～ HRDファインアート 開廊10周年記念展 ～

会　場： HRDファインアート
（京都市上京区上御霊竪町494-1）
会　期： 2025年 10月18日（土）～ 11月29日（土）
時　間： 木曜日　11:00～15:00
金・土曜日 / 10月19日（日） / 11月24日（月・祝）　11:00～19:00
休　廊： 日～水曜日（事前のアポイントにより観覧可能）
※ 10月19日（日）・11月24日（月・祝）はオープン（11:00～19:00）
出品作家： アクセル・ヒュッテ、フィゲン・チェベ、本原令子、髙木智広、しんぞう、奥中章人、マルガリート・ダバーイ、家原恵太、チェ・ナリ、ウェイシン・クェック・チョン

オープニングレセプション：10月18日（土） 17:00～

【展覧会概要】

2015年4月にオープンしたHRDファインアートの常設ギャラリーは、今年2025年、10周年を迎えています。この節目にあたって、これまでのギャラリーとしての活動を振り返り、今後の活動への指針を示すための記念展として、2025年10月18日から11月29日までの会期で「IO」（アイ・オー）と題したグループ展を開催いたします。

展覧会タイトルの「IO」は、数字の「10」と読めると同時に、「Input/Output」の意味も込めています。これまで、外部の企画展やアートフェスティバル、アートフェアなどで関わりを持ち、一緒に仕事をしたことがあるものの、HRDファインアートの京都のギャラリーでの企画展（公募展やコレクション展を除く）では作品展示をしていないアーティストに絞り、10名の多様なアーティストの作品をそれぞれ1点ずつ展示し、合計10点の作品により構成します。「百人一首」ならぬ「十人十点」の、「10づくし」の展覧会となります。

これまで様々なかたちでHRDファインアートに豊かな「インプット」を提供してくれた多くの（今回の展示には参加しないアーティストを含めた）アーティストたちへの感謝とリスペクトの思いを込め、ギャラリーでの展覧会というかたちで、社会への「アウトプット」として提示します。

ディレクター・原田明和の個人的な思いが色濃く反映された、これまでのHRDの企画展とはスタイルの異なる展覧会となります。ぜひご高覧ください。展覧会に合わせて、10人の展示アーティストとの出会いや関わりのエピソードを紹介したエッセイを収録した図録兼冊子も制作予定です。

【出品作家・作品画像】（*のついた作品画像は参考作品です）

①
アクセル・ヒュッテ
Axel HÜTTE

1951年ドイツ・エッセン生まれ。現在、ドイツ・デュッセルドルフ在住。デュッセルドルフ美術アカデミーでベルント・ベッヒャーのもとで写真を学ぶ。

現代ドイツを代表する写真作家の一人にも数えられる、世界的なアーティスト。写真家でありながら「風景画家」の異名をとり、絵画史やイメージの歴史への豊かな知識に裏付けられた、叙情性と神秘性、緻密な画面構成を併せ持つ大画面の写真作品を数多く制作・発表している。都市・建築の写真と自然風景の写真の両方を手掛け、世界各地を旅して撮影を行う旅行家でもある。2010年から2015年にかけては日本国内でも撮影旅行を行っている。

2017年にはデュッセルドルフとボットロプの美術館2館で大規模な回顧展を同時開催した。また2025年にはローランゼックのアルプ美術館でも回顧展を開催、2026年にはブルクリーデンのフィラ・ロート美術館で回顧展が予定されている。

アクセル・ヒュッテ《リギ・クルム》
ディトーンインクジェットプリント／ハーネミューレナチュラルペーパー
37×48.6cm（イメージサイズ）　エディション50+AP10　2019年
© Axel Hütte

②

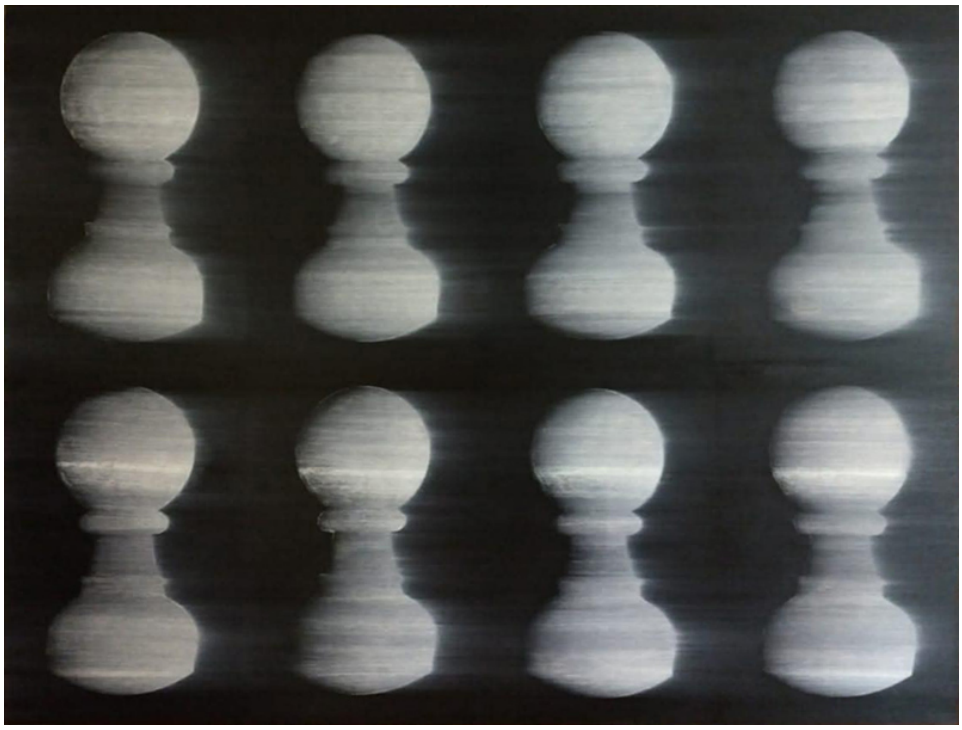
フィゲン・チェベ

Figen CEBE

1956年トルコ・アンカラ生まれ。現在、フランス・ブルターニュ地方／アンカラ在住。

白黒や赤のモノトーンを基調に、記号性と象徴性を備えた幾何学的で静謐な雰囲気の抽象絵画を制作する。ブラシを用いて、ブレやボケ、残像のような効果を表出したその絵画画面は、壊れやすく移ろいやすい人間の記憶や記録のあり方を想起させると同時に、作家自身の東洋思想に対する強い興味・関心も反映されている。

EUの報道・広報担当官としての経験も持つチェベは、ソーシャルメディア上で現代の政治・社会問題に対する積極的な発言も続けており、そうした姿勢はその作品にも反映されている。



フィゲン・チェベ《We Are All Ordinary and Broken Pawns》*
油彩／キャンバス

③

本原 令子

Reico MOTOHARA

1963年静岡生まれ。現在、静岡在住。多摩美術大学を卒業後ロンドンに渡り、セントラル・セント・マーチンズ美術大学とロイヤル・カレッジ・オブ・アートで陶芸を学ぶ。

陶器を制作の中心に据えながらも、人と人の関わり、人と土と水（＝自然）の関わりを大きなテーマに、インスタレーションやパフォーマンス、動画など、幅広い創作・表現に取り組んでいる。近年はエストニアやスウェーデンでレジデンスに参加し、食にまつわる現地制作を行った。

2025年BIWAKOビエンナーレに参加・出品。

本原 令子《Kitchen Stories in Joenju》*

インスタレーション

（「東アジア文化都市現代美術特別展示：和／Harmony」（2023 年、韓国・全州）展示風景）

④

髙木 智広

Tomohiro TAKAGI

1972年岐阜生まれ。現在、京都在住。1995年にヨーロッパに渡り古典絵画技法を研究した。

パプアニューギニアの奥地を訪れ、現地の人々の原始的な生活や精神性に触れた経験から、人間と自然のつながりやその境界の曖昧さをテーマとし、神秘性やファンタジー性に不穏さ、またダークなユーモア感覚も込めた絵画の制作に取り組む。アジアを中心に国内外で幅広く展示。

また、展覧会の企画にも積極的に携わり、数多くのアーティストと連携しながら展覧会のキュレーションも手掛けている。11月には京都・妙蓮寺で自ら企画を手がけるグループ展を開催予定。

髙木 智広《潮騒》*

油彩／キャンバス　61×50cm　2025 年

⑤

しんぞう
SINZOW

1974年横浜生まれ。現在、新潟在住。1997年武蔵野美術大学造形学部油絵科卒業。2001年「GEISAI（芸術道場GP）」で銀賞受賞。

家族関係や社会と個人の関わりなど、身の回りのありふれた事象や体験を、豊かな色彩と分厚くダイナミックな筆触で戯画的に描き出す。「ひと」を一貫したテーマとするその作品は、ユーモラスさと深刻さが絶妙なバランスで共存し、様々な解釈を可能にしている。

新潟、大阪、京都、そして韓国ソウルで精力的に展示活動を行い、近年は陶芸の制作にも取り組んでいる。

しんぞう《Holiday》*
アクリル／キャンバス　116.7×91cm　2021 年

⑥

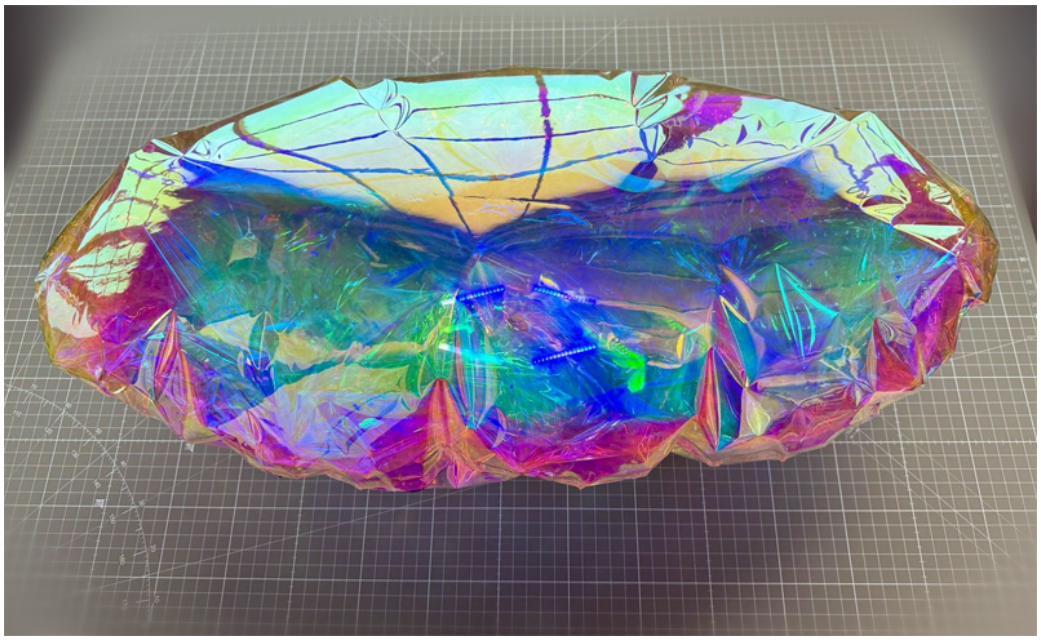
奥中 章人

Akihito OKUNAKA

1981年京都生まれ。現在、京都・木津川在住。2004年静岡大学教育学部卒業。

空気や水の流れ、動態といった人間の視覚では捉えづらい存在をテーマに、実際に手で触れ、その動きや作用を体感することができるような大規模な動的彫刻・環境彫刻の作品を制作する。近年は、虹色の特殊フィルムを使用し、風を送り込むことで形態を維持して鑑賞者が中に入ることもできるようなインフレータブル（バルーン）や、水を充填して上に乗ることができる水枕状の作品など、参加・体感型作品に特に力を入れている。

また、美術教育を専門に学んだ経験を生かし、子供から大人までを対象とした体感型アートのワークショップも国内外で数多く手掛けている。



奥中 章人《INTER-WORLD/Cocooner: Apparent motion of celestial bodies_mobile》
ナノ積層フィルム、空気、光、ファン、LED照明、ステンレス台座
25×30×60cm　エディション5　2025年

⑦

マルガリート・ダバーイ

Marguerite DABAIE

1981年米国・サンフランシスコ生まれ。現在、京都在住。ニューヨークのスクール・オブ・ビジュアル・アーツにて学士号を、ファッション・インスティテュート・オブ・テクノロジーにて修士号を取得。

パレスチナ系アメリカ人としての出自を持つ自らの実体験をインスピレーションとして、イラストレーションやコミック、コラージュなど、多彩な技法・素材を用いて作品を制作。社会正義の追求や、人種差別をはじめとするあらゆる差別の解消に向けた闘争をテーマに、歴史的な問題をベースとしながらも、現代的な要素を取り入れた作品を生み出している。

2024年に米国を離れて来日し、現在は京都を拠点に創作活動を行っている。

マルガリート・ダバーイ《thaqafa bunka》*

コラージュ（布）　2025年

⑧

家原 恵太

Keita IEHARA

1982年京都生まれ。現在、京都在住。2006年京都精華大学造形学科版画専攻卒業。
「家屋」を中心的なテーマとして、その形態や記憶、ひとの暮らしとの関わりなどに着目した作品制作を行う。また近年は、農業に携わった経験から、動植物や自然と人間との関係性や「生きる」ことを主題とした制作にも取り組んでいる。

絵画や立体から版画、写真、映像、さらには音楽の制作まで手掛け、多彩な技法と手法を駆使した幅広く独自性豊かな表現を展開している。

家原 恵太《Prayer of the Sheep ～ 羊たちの祈り ～》*
立体作品、フェルト人形、映像作品によるインスタレーション　2023年

⑨

チェ・ナリ

Nari CHOI

1983年ソウル生まれ。現在、京畿道ハナム市在住。2007年誠信（ソンシン）女子大学美術学部卒業。2023年同大学院にて博士号取得。

男女の関係性や社会的役割、ジェンダーに関わるステレオタイプや伝統的な既成概念をテーマに、戯画化した人物像をポップでダイナミックなカラーで描き出す絵画作家。描かれる人物は多くの場合ヌードで、また顔や表情はなく、鑑賞者はそこに自らの体験や感情を照射する。

近年では絵画制作にとどまらず、立体作品の制作や、ファッションブランドやインテリアデザインとのコラボレーションによるプロジェクトも手掛けている。

チェ・ナリ《Sexy Mato 38》
アクリル／キャンバス　53×45cm　2024年

⑩

ウェイシン・クェック・チョン
Weixin Quek CHONG

1988年シンガポール生まれ。現在、スペイン／シンガポール在住。2011年にラサール芸術大学（シンガポール）にて美術学士号、2014年にロイヤル・カレッジ・オブ・アート（ロンドン）にて美術修士号を取得。

ラテックスゴムやシリコン、ゼラチン、さらには生きた植物など、古典的な彫刻作品には用いられることのない素材を使用し、視覚はもちろん触覚や嗅覚など様々な感覚に訴えかけるサイバーパンクな立体作品やインスタレーションを制作。写真や映像など多彩なメディアも駆使し、人間の身体と社会との関係性の揺らぎや、自己と他者の境界の曖昧さを明らかにする作品を生み出し続けている。

ダンサーやデザイナーなど他分野のアーティストとのコラボレーションも積極的に展開している。

ウェイシン・クェック・チョン
《Flesh skin surface. 3 / Chrysanthemum indicum, YSL Touche Eclat Shade 2.5》
写真（阿波紙にプリント）／アルミニウムボード　80×54.1cm　エディション3+AP1　2017年

＊＊＊

お問い合わせ：HRD FINE ART
（エイチアールディー・ファインアート）

住所：〒602-0896 京都市上京区上御霊竪町494-1
電話：090-9015-6087（担当：原田）
ウェブ：http://www.hrdfineart.com
E メール info@hrdfineart.com